

## 資料紹介

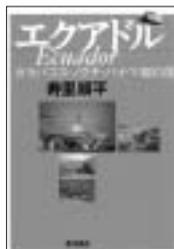


アルベルト松本著『アルゼンチンを知るための54章』  
明石書店 2005年 388ページ

本書の著者アルベルト松本氏は、アルゼンチン生まれの日系アルゼンチン人であり、プエノスアイレスの大学を卒業している。同氏は1970年代の軍事政権のありさまを目撃し、また同軍事政権が起こした英国とのマルビーナス戦争に従軍し、さらに80年代の経済危機およびハイパーインフレを経験するなど、アルゼンチン現代史を文字どおり実体験した人物である。そのため本書は、単なるアルゼンチンの紹介を越えた深みのあるアルゼンチン全般にわたる解説書となっている。

本書第1部では、植民地時代から現在に至るアルゼンチンの歴史を概説している。現代を扱う15章では、2001年末の経済危機に至る過程が簡潔だが要領よく記されている。第2部では、社会と文化に関する解説がなされており、特に教育問題、高率の失業に代表される雇用問題、また貧困問題などの記述は興味深い。また、アルゼンチンの生活風習やアルゼンチン人気質に關しても触れている。第3部は政治と経済の解説であり、アルゼンチンにおける民主主義の問題点や債務問題に代表される経済の抱える諸問題を鋭く分析している。弁護士資格をもつ多くのタクシー運転手の存在など、雇用問題が抱える複雑な様相を記述している。そして第4部は「アルゼンチンと日本」と題され、現地の日系社会の歴史や現状、日本への出稼ぎの現象を分析している。本書は、現在日本語で書かれたアルゼンチンを総合的に理解するための最良の書であり、またより深くアルゼンチンを知りたいという人には、格好の手がかりやヒントを与えてくれるであろう。

(宇佐見耕一)



寿里順平著『エクアドル ガラパゴス・ノグチ・パナマ帽の国』東洋書店 2005年 351ページ

本書は1960年代からエクアドルに通い続けた著者が、さまざまな角度から主観も交えて同国の姿を描き出した概説書である。本書の内容を大きく分けると、同国の地理的特徴を紹介した第1～3章、歴史を解説した第4～5章、自らの体験をとおして現代のエクアドル社会の特徴を描いた第6～7章、日本との関わりについて説明した第8章となる。

なかでも興味深いのが、多民族と政治の關係を取り上げた第7章である。エクアドルはその憲法で民族多様性を誇る国家として規定している。実際に、ブカラムやマワドなどレバノン系の大統領が生まれている。にもかかわらず、政治のみならず経済でも大きな影響力をもつ中東系やアジア系の人々は多民族の一部とは認識されていないという。中東系の人を「トゥルコ」、アジア系の人を「チノ」とまとめて侮蔑的に呼び、地理や歴史の教科書でも中東系やアジア系の人々に触れた記述は皆無であるなど「存在自体を認めていない」としている。

著者自身が「チノ」と侮蔑的に呼ばれた体験や、現地在住日本人に対するエクアドル人の蛮行など、ネガティブな面についての記述も多い。しかし著者は同時にエクアドル人のひた向きで勤勉な面も強調しており、著者の厳しい指摘はこの国に対する愛情の裏返しであることがわかる。

その他、パナマ帽の原産地がエクアドルの海岸地方であること、ガラパゴス諸島が犯罪者の流刑地だったこと、野口英世のエクアドルにおける黄熱病の「発見」の碑文の横には訂正文が付記されていることなど、興味深い事実が詰め込まれている。

本書は、エクアドルをすでに訪れたことのある人やビジネスや研究などで同国と関わりをもっている人にこそ薦めたい。本書の内容に読者自身の体験を合わせることで、現代エクアドルへの理解がより深まるだろう。

(清水達也)



中王子聖著『チリの闇 行方不明者を持った家族の証言』彩流社 2005年 274ページ

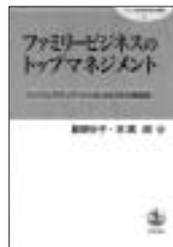
ピノチェト將軍らによるクーデタからすでに30年以上経過し、チリにおいても軍事政権下の人権侵害の和解を求める意見は、広がっている。チリの国際イメージを高め、対外的な政治・経済関係を強化したい政府にとって、人権侵害問題は、まさに過去のものとして「闇」に葬りたい歴史的一幕といえよう。

しかしながら、国家権力によって突然家族を失った者の喪失感には、けっして癒えることはない。チリの「拉致被害者の会」の街頭運動は、今日でもしばしば目にするが、本書はこれに参加する人々の長い独白を記録することで、その心理状況を克明に描いている。

本書は2部構成をとっている。前半は、チリの歴史概説となっているが、本書の価値は後半の被害者家族10名の156ページに及び証言録にある。インタビュー記録というよりは、むしろ独白に近いスタイルで語られており、被害者家族自身の言葉で自らの心理状況が語られている。人権侵害問題としては、侵害状況の究明とその責任に焦点が当てられることが多いが、同時に、家族を失った者の心理的なケアも重要なことに気づかされる。

3月に大統領に就任したバチェレ氏は、軍人であった父を軍政下で拷問によって失い、自身も囚われの身となった経験もある。それでも、民政政権の閣僚として軍との信頼関係を築き、国民融和のイメージを作り上げてきた。彼女へ政治的支持が集まった理由は、このような経歴にも関係するが、大統領となった今、人権侵害問題への対応は難しい政策課題となろう。本書は、このような複雑なチリの政治状況の背景を理解する上で、重要な資料を提供している。

(北野浩一)



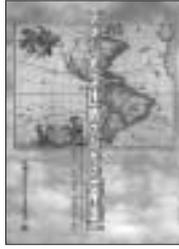
星野妙子・末廣昭編『ファミリービジネスのトップマネジメント アジアとラテンアメリカにおける企業経営』(アジア経済研究所叢書2)岩波書店 2006年 vii + 290ページ

第2次大戦以降、アジアとラテンアメリカは急速な工業化をなしとげた。その牽引役の一角を担ったのは、財閥やグループと称される大規模ファミリービジネスであった。大規模ファミリービジネスが各国経済において支配的地位を占める状況は、数多くのファミリービジネスが経営破綻した1997年アジア通貨危機以降も変わらない。経済グローバル化が進み、企業間競争が激化する環境下においても大規模ファミリービジネスが存続を続けるのはなぜか。その理由を本書はトップマネジメントに焦点を当てて究明している。

分析対象とするのはメキシコ、ベネズエラ、ペルー、韓国、台湾、タイ、以上6カ国・地域の代表的なファミリービジネスである。本書で明らかとなったのはトップマネジメントを時代環境に適應させて生き残りを図るファミリービジネスの姿であった。経営の三機能(意思決定、業務執行、監督)の分離、業務執行からのファミリーの後退と専門経営者の進出、経営者の高学歴化、が各国共通にみられる近年の傾向として指摘されている。

本書は2002～2004年度にアジア経済研究所において実施された発展途上国のファミリービジネスに関する研究プロジェクトの成果の一部である。本書の前編として同じ編著者等により『ファミリービジネスの経営と革新 アジアとラテンアメリカ』(アジア経済研究所 2004年)が刊行されている。この2冊によって、ファミリービジネスの最新の経営実態と今後の展望について、新たな知見を提供できたと考えている。

(星野妙子)



天理大学アメリカス学会編『アメリカス世界のなかの「帝国」』(アメリカス研究第10号)天理大学出版部  
2005年 283ページ

近年、「帝国」をキーワードに世界の状況を読み解こうとする試みが社会学者や人文学者の間に広がっている。ウィキペディアによれば「帝国主義」とは一国家が自国の民族主義、文化、宗教、経済体制等を拡大するため、他国を侵略し、覇権を拡大していく思想や政策を指す。

言うまでもなく、ラテンアメリカ諸国は、植民地時代より、常に欧米列強諸国の覇権の脅威にさらされてきた。本書はそういった歴史的経緯を踏まえつつ、南北両アメリカを一つの大きな文化圏としてとらえ、アメリカス世界の歴史、経済、政治、言語、文化、芸術に潜む「帝国」の諸相を解き明かしてゆく。

所収論考の一部を紹介すると、島田論文は歴史家でもあったT.ローズベルトが「アラモの闘い」の戦死者の英雄物語を米国青少年の民族主義の鼓舞と国民統合の推進に利用したと論ずる。上谷論文は、植民地時代から現在まで、ラテンアメリカにおいて展開されたスペイン、英国、米国の帝国主義的政策を分析する。初谷論文は、米墨戦争中にユカタン州から米国に派遣されたフスト・シエラ・オレリーの対米協調者としての言動を分析し、ラテンアメリカの為政者自身が抱く帝国主義を明らかにする。野口論文は、反米・反帝国主義者チャベス大統領の政治思想を支える「歴史認識」を分析する。吉川論文は、イデオロギーがからんだ政治的問題である米国の英語公用語問題を、建国時から現在までの帝国主義的言語政策と共和党政権との関係から論じる。

本書の興味深い点は、多様な論考により、アメリカス世界の中に潜む「帝国」が重層的に描きだされているところにある。各論考は単独のエッセーとして読んでも楽しい。

(村井友子)



石橋純著『太鼓歌に耳をかせ カリブの港町の「黒人」文化運動とベネズエラ民主政治』松籟社  
2006年 574ページ

本書は著者の博士論文をもとに書き下ろされた渾身の力作である。舞台はベネズエラ北部、カリブ海に面した港町プエルトカベージョの一地区(パリオ)、サンミジャンである。この地に住むあるリーダーが、パリオ内で引き継がれてきた太鼓歌の宴(タンボール)を守るために組織した地域文化復興活動が本書の主題である。人類学を専門とする著者は、長年にわたりサンミジャンでフィールドワークを重ね、数多くの人々とのインタビューや観察のなかから、ベネズエラにおける「黒人」「民俗文化」とは何か、そしてそれらが石油開発により急速に変化するベネズエラ社会においてどのように位置づけられ、また政治とのいかなる相互作用のなかで展開してきたかをあぶり出す。

著者は、パリオの気配が感じられるほど生き生きとした筆致でミクロの視点からサンミジャンの文化復興運動を描き、それを人類学のさまざまな概念や議論を使って料理する。そして第8章、第9章では視点をマクロに引き、先行する章でミクロの視点から論じた点を近代ベネズエラの変化のなかで位置づけ直す。それを受けて後半4章で再びサンミジャンのパリオにフォーカスを絞る。この視点のスイッチにより、サンミジャンを一つの事例として、近代ベネズエラ社会の急速な変化と、反対に歴史を通して変わらずに脈々と流れる政治文化が浮かび上がってくる。

筆者の研究主題に対する真摯な取り組み、緻密な情報収集および論理展開は強い説得力をもち、ベネズエラ社会を理解する上では必携の書となっている。また読者を惹きつける語り口やドラマ仕立てともいえる章構成によって、本書は人類学やベネズエラ(あるいはラテンアメリカ)とは関係のない一般読者にとっても大変興味深い一冊になるであろう。

(坂口安紀)